ラダク（西チベット高原）その自然と文化

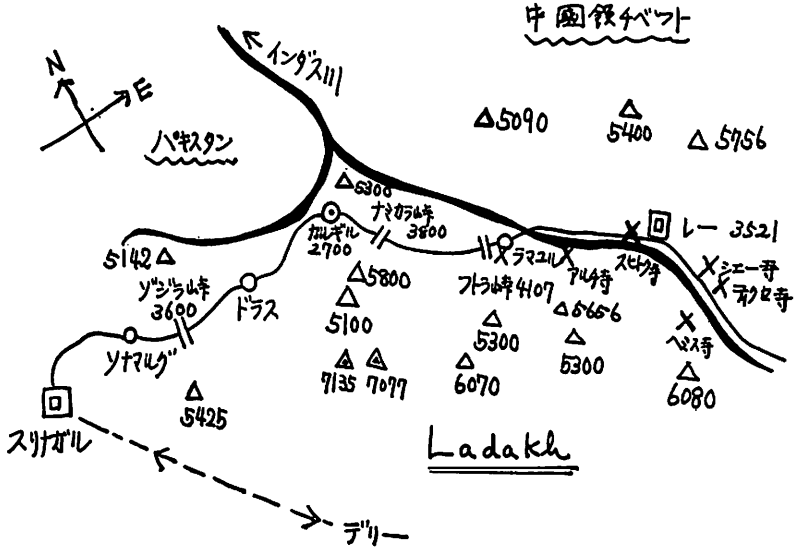
高橋　堯昭

ラダクという西チベット高原のヒマラヤの秘境がやっと外国人に開かれた。中国とパキスタンと接する国境紛争をもつこの地は今までかたくなに鎖国状態を続けていた。然しここは仏教関係者にとっては垂涎の的だった。なぜなら現在我々はよほどのことのない限り中国領チベットには行けないし、又行けたとしても中共治下仏教はほとんど消滅している現状から、ここはチベット仏教を知る唯一の所だ。幸いにも私は一九七八年八月この地を訪れることが出来た。

これは西チベット高原という特異な自然環境の中で考えた「自然と文化との関連」についての試論である。

◈

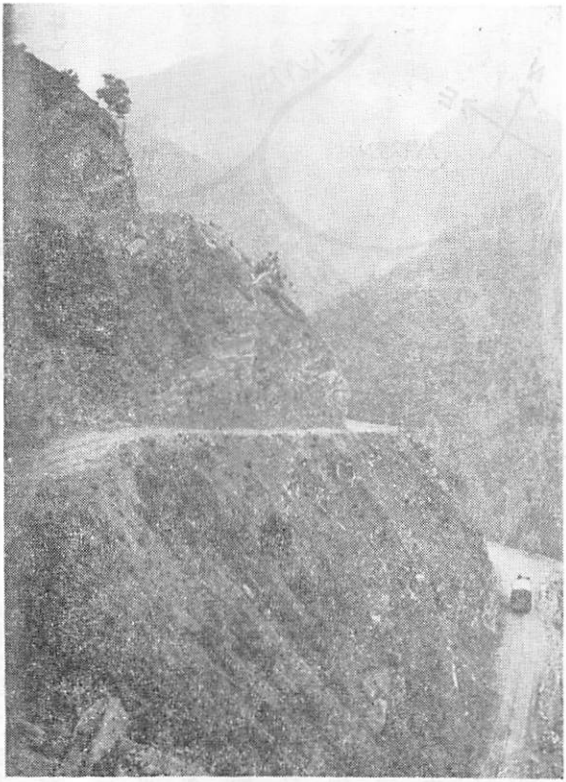
インド北西部カシミールの主都スリナガルから車を走らせて北東八十余キロ、ソナマルグで一泊。ここは四千米近いゾジラ峠をこえる根拠地。このゾジラ峠は天下の険、道巾もせまいしトラックがやっとの断崖絶壁をけずった路肩軟弱の道。ここを一日二回交互通行で交通を規制しているから、その時間帯でないと通れないし、又三千五百米以上



の高原に一気に登ると高山病が心配になるのでここに一泊して行く。もっとも官営の直通バスは中程のカルギルで一泊して五百キロ余の山路を二日でつっ走ってはいるが。

目もくらむような断崖を曲りくねって登る。峠を登り切るとあたりは一変する。今まではみどりの木々におおわれていた山々が全く姿をかえて、木など全然見当らなくなる。せいぜいあるのは雪どけ水のまわりに生える苔のような草だけ。それも一時間も車をとばすともう姿を消し、唯赤茶けた砂漠と岩だらけの峯々、そしてその麓にはうず高く積った雪どけ水に流された土砂。みどりといえば蛇行した川の内側の推積地に生えたポプラやアンズの木くらいのもの。文字通り猫の額のような狭い畑に麦が植えられ、そばの白い花が印象的だった。人家は皆岩の上、耕作出来る所には家は作らない。それ程耕作出来る土地は乏しく貴重なのだ。

一時間も走れば、あとはほとんど同じ風景。然し自然の造型不可思議さ、岩の肌の色や峨々たる峯の形が単調な旅を慰めてくれる。あの岩山も何億年か前には海の底の泥だった。



湿潤と乾燥との分水嶺ゾジラ峠

それが岩となり、地殻の変動で隆起し又大自然の力で右に左に或は上に下に押し曲げられていろいろの形を呈するに至った。その気の遠くなるような自然の悠久な歩みと、それにひきくらべて人間の卑小をしみじみと味わいながら。

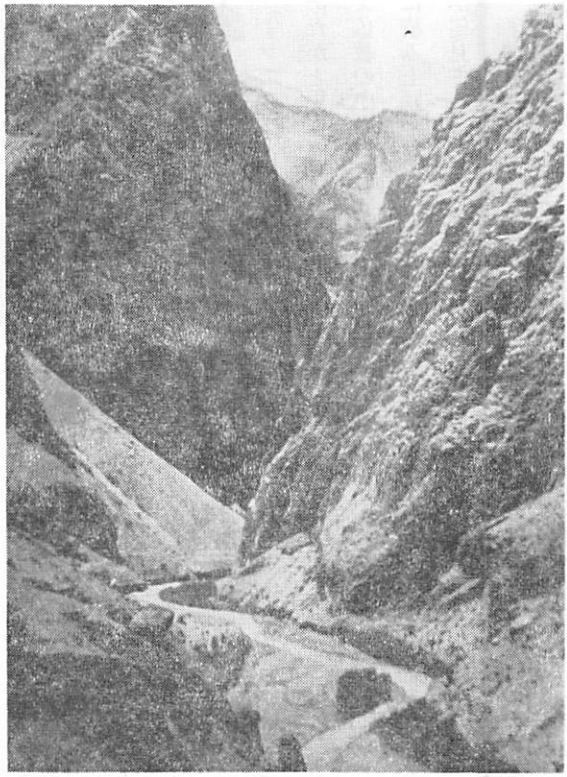
小さな部落を過ぎるとすぐ山道にさしかかる。山を越えると又部落。川べりの急斜面から滑べり落ちそうにへばりついている部落もあれば、山合いの谷間に雪どけの泉をかこんだオワシスの部落もある。どれもこれも泥をねり、石を積み上げた家々。

ゾジラ峠を堺にして自然の風景が変るだけではなく道行く人の姿も服装も中央アジヤ的となり、家々のたたずまいもめっきり回教風の作りになって来た。

我々の常識では高い山には必ず雪が降るのだが、ここヒマラヤの山中では五千米以上の山脈が幾重にも重なり南東から西北に走り、これがコンロン山脈パミール高原に、又ヒンズークシの山々に連っているのだから、モンスーンの

雨雲はさえぎられて降雨量も全く少ない。従って冬の雪も非常に少く、雪線も非常に高い。為にあたりは砂漠化し山々は裸。木がないから雪どけ水に砂は流されて岩だけが峯々に残る。

世界で二番目に寒いという、ドラスを通りカルギルという町に着く、この町はスリナガルからレーへの中間点。特に目につくのはモスクや回教風の建物の多いことだ。回教の中心地とか、回教がラダクに入って来たのは西隣りのバルチスタン、ギルキットを通って中央アジヤの方から入って来たという。未だこの町ではチベット人は余り目立たない。人種的に見てモンゴールやウィグルの中亜系の人達。カルギルを過ぎると部落のたたずまいは序々にチベット風になる。家の造りはそう違わないのだが、家の屋根に五色の旗がはためき、チョルテンといって仏塔がぽつぽつ見えて来る。途中ムルベックという町を過ぎた道路沿いに巨大な弥勒菩薩の像が彫られている。ここに来ると人々の服装はチベット風になって来る。そして四千米近いナミカラ峠



ヒマラヤの山中

や四千百米のこの旅の最高所、フトラ峠を過ぎると部落の中のチョルテン（仏塔）の数が益々多くなる。いよいよチベット仏教圏に入った感がある。特にフトラ峠の麓ラマユルン大僧院が峨々たる岩山を背景に望見されるに及んでは。

ラマユルのゴンパ（寺）から生命がけの難所を長い間肝を冷やしながら走る。足元はるか千米も二千米もの下にインダスの支流が光っている。この高所からまっさかさまにインダスの本流まで下る恐しさ。チベット版イロハ坂を下って。インダスの支流といってもここでは未だ川巾はせまい。然しこの急流がパキスタン領バルチスタンに入り、多くの流れを併せ、猶仏教華やかなりレガンダーラでアフガニスタンから来たカブール河を合せて、長い長い旅のもとモエンジョダロのインダス文明を発達せしめたかと思うと感慨無量。

インダス河をさかのぼって行くといよいよ仏教の中心地。部落の入口と出口には経石の山（お経を彫った三十センチ大のマニ石が巾二米高さ一米半の堤防状に積み上げられたもの）が何十米と続く。山の頂上にはチベットのラッサのポタラ宮を思わせるお城のようなゴンパが望見される。これを見ただけで中国領チベットをしのばせるに十分。

かくして我々は延々五百キロの長旅の末、西チベット高原ラダクの中心地レーにたどりつくことが出来た。まさにこのたどりつくという表現そっくりの生命がけの旅の果てに。

レーの町は岩山にはさまれたみどりの木の生えるオワシスの町。インダス川から相当上った所にある。遠くから見るとあの裸の岩山の間にどうして人口五千人もの町があるのかと不思議に思われるような山合いにあり、山頂にある旧王宮から見下ろすと、まさに地中海沿岸のカスバのような家並がひしめいている。乾燥的世界の共通性を感ずる。

冬にはマイナス五十度にも下り、私の行った夏には陽の下では三十五度、ひかげは二十度、夜は十度以下と全く我

チベットの寺　すべての寺はこれに似ている

々の常識では考えられない温度差苛酷な自然だ。

この夜はチベットホテルへ。電気もない。電気がないから水も出ない。どこから運んで来たか、ボーイが大きなバケツで水を部屋に運び上げた。そばには大ダライ。これで体をふき洗面する為のものだ。生れてから死ぬまで風呂に入らない。水とは飲み水だけの彼等の生活を、はからずも第一夜から味わうことになった。

◈

私達が越えて来たあの四千米のゾジラ峠はまことにユニークな峠であった。それは湿潤と乾燥との自然の分水嶺だけではなく、そこに生れた文化の分水嶺でもあったから。

カシミールは、インドでは一番日本に似た風土の所である。山には木が特に松の林が一ぱい。農地には稲が生えてその風景は人物や水牛がいなければ、まるで日本の田舎と見まちがうばかりの所、雨期にはモンスーンの雨量を集め、乾期にも山々からの水で川はふんだんに湖に

流れこんでいる。（大ていのインドの川は乾期には涸れたり水量が大変へる）。だからここはインド有数の農業圏をかたち造っている。そしてかってヒンズー教や仏教が栄え、特に仏教はクシャン朝のカニシカ王の保護をうけてアビダルマの理論仏教がその華を咲かせた所。然し十一・二世紀に回教が侵入し、ここの王朝を倒して回教国を作り、他の宗教を禁止追放して回教をひろめて行った。回教以前は峠の向う側はシャーマン的な民間宗教や密教化した仏教、所謂チベット仏教であったのに対して、こちら側はヒンズー教や仏教という地図が一瞬にして回教一色にぬりかえられて行った。勿も回教はレーを占領して王朝を作ったこともあるけれど、カルギルまででそれ以東は仏教が依然として残っていた。これも四千米五千米のけわしい山々にとり残された部落という特殊な環境からであろう。

要するに乾燥世界はシャーマン的宗教（ラマ教もこれに入る）であったのに対して、峠のこちら側はヒンズー教や仏教の沃地の宗教が栄えていた。これが回教一色にぬりかえられて行ったのだ。回教は軍隊をもって侵入し、他宗の堂塔をこわし、それに従わないものには容赦なき殺戮をいとわなかった。こうしてアラビヤに発したこの宗教はエジプトから中央アジヤ全域を支配し、インドやインドネシヤの乾燥圏以外の地域にも進出して行った。然しここで興味ある問題はこのカシミールに入って来た回教やインドネシヤに入った回教は多分にその形態を変容して行ったことである。回教は一神教、その厳密な戒律によってアラーの神以外は信仰しない。然もその神は対象化偶像化されないばかりでなく花や植物、ひいて文字までも偶像化をさける為、図案化象徴化して行った。だからモスクの中には何もない。唯がらんとしたお堂でメッカの方向に祈るのみであって、仏教の仏・菩薩諸天の像のような多神教的な考えは全然認められない。

この多神教化偶像化をきらう厳密な回教が、このカシミールやインドネシヤでは大分様子が変り、特にインドネシヤ

あたりではその熱帯的自然とヒンズー教の伝統が加わって、恰も多神教的と思われるように変容を来している。然しここカシミールではそれ程ではないにしてもやはり変って来ていると思われる。その第一は聖者信仰の重視である。聖者というものは回教の聖者に止らず、その土地を開拓したり、水源をほり当てた人という風に範囲がひろまり、彼等が超能力をもっていたかの如き言い伝え、そして信仰まで出て来て、この聖者のお墓は非常に立派になり、いろいろの装飾や沢山の旗がはためくようになった。又不可思議な形をした岩や木等にも精霊が宿るという信仰が見られるようになったから、純粋な回教からは大分離れて来ているように思われる。従ってゾジラ峠の上と下では同じ回教圏でもそこに差が出て来ているように思われる。果してこれは何故なのだろうか。

◈

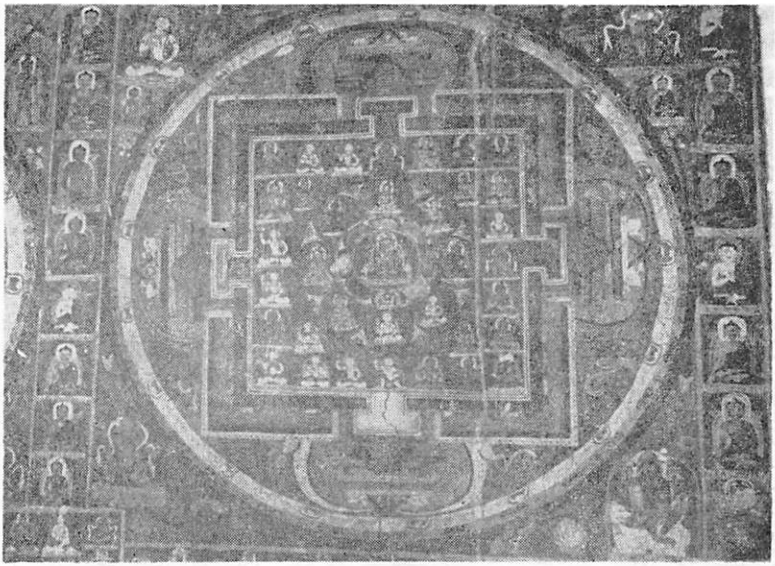
仏教はチベットに七世紀頃入った。当時王室を中心とする上層階級にうけ入れられたのは「金光明経」等の護国経典で教理の面では中観派や瑜伽唯識のインドの大乗仏教であった。やがて八世紀ナーランダの学僧寂護（シャーンティラクシタ）が招かれ、又一方西北インドのウディヤーナから呪術に秀でた蓮華生（パドマサンバー）が招かれたことから、民衆には密教的なものがうけ入れられて行った。特に蓮華生の一派は精霊や鬼神を駆使して除災をはかるボン教等の民間信仰をうけついで密教を民衆に定着させて行った。これがニンマ派（紅帽派）といわれたものである。やがてアティーシャが出てチベット仏教と大乗思教とその戒律、そして密教とを融合する新しい教学を打ちたてて行ったが、これらの密教は年をふるに従って余りにも俗習と密着堕落して本来の仏教の本質までも失うような状態になった。ここで十四世紀から十五世紀にかけてツオンカパが出て本来の仏教、密教にもどすべく宗教改革を行った。即ち厳格な戒律主義独身主義で仏教の本質を回復せんとした。これがゲルツク派（黄帽派）と呼ばれた派で十七世紀か

ら最近の中共によるチベット支配まで続いたラダイラマの正統チベット仏教であった。

本来の仏教から逸脱したシャーマン的紅帽派がチベットに発展した理由は、インドから仏教が輸入された当時インドに密教が全盛であり、特に八世紀以後はタントラ教の色彩のこいインド後期密教をうけついだことは論をまたないが、私はそれ自身密教相応の地をここに見出して発展したのはそれ自体理由があるからだと考えたい。

特にチベット仏教で特徴的なのは「仏法僧」の三宝より「師」を重んずる態度である。チベット語の「ラマ」とは尊敬すべきものという意味であって、この典型的なのが化身仏の信仰である。最大の化身仏はダライラマであることは一般に知られているが、その他沢山の化身仏がいることは案外知られていない。一寸した大寺には○○菩薩の化身とか、○○天王の生れ変りという高僧が沢山いる。それだけではなく「成就者」という超能力者が沢山いて、チベット仏教ではこれら化身や成就者を通じ

羅茶曼



て悟りに至るという道をとる。然らば成就者とは何物かといえば「空たる現実世界と、実在の真理、これらの対立を越えて同一性を体験の中で悟った」人である。勿論仏教のどの派もこの真理を説く、然しこれへの道程は非常に長く生き変り死に変りして修業してはじめて到達出来ると考えるのだが、ここでは「即時」に「秘密」裏にこの合一が出来るとする。所謂「即身成仏」がこれである。このように理屈をとびこえて神秘的に合一体得した人を成就者という。従って彼等は超能力をもち神秘を現ずることが出来ると尊敬され、これが精神的世界のみでなく、現実の社会、否医療の面にまで絶大な力をもっている所がチベット仏教の大きな特徴である。

然らば顕教が入りながら発達せず、又密教がとり上げられても「三宝」より「師」という「人」の関係が発達し、更に次に述べる左道密教にまで進展して行ったのは何故であろうか、これ又大きな問題をはらんでいる。

◈

チベット仏教で特に注目されるのは恐しい形相をした忿怒身怖畏身の神像で、男神が神妃と抱擁している像や絵が沢山あって異常な雰囲気をただよわせている。

チベット仏教では仏でも温畏二つの姿をもつとされて来た。外敵を退散征伐させるには温顔だけでは駄目で、悪魔以上に恐しい形相と力をもったものでなければならないと信ぜられ、三つの目をもち怒髪天を突くドクロをつないだ首かざりや虎や、人間の生き皮を腰にまき、蛇を帯として足もとに種々の生きものを踏まえる、考えるだけでも身の気のよだつ容相のものが作られるようになった。然も男女合体身、現代人には奇異の目で見られるこの像もここでは理由あってのことだったのだ。曰く、「単身では十分な力が発揮出来ず、男女合体の姿においてのみ完全性が実現され最高の力が得られる」と。そもそも仏教では「真理や実体は空にして受動的なそして女性的な原理で、動的な男性的

歓喜天

原理は方便の活動を属性として現象世界で働いている。この実体と方便、空仮の両原理は本来一にして、その合体こそ宇宙の真実の姿を示すものである」と理論的に説かれて来た。然しここチベット仏教ではそれを現実の男女の抱擁という形をかりて視覚的に表わし、ひいて実際にそれを体験することが悟りに通ずると主張されるまでに立ち至った。この状態が大楽と呼ばれ、亡我の境、悟りに通ずるものとされるに至った。そして女性との厳しい禁欲は欲求不満或はいろいろの精神的な歪みをもたらす為、適度な性的交渉をもつことによって逆に生理的機能を正しく制御し精神活動を高めるという面をもつと主張するに至った。かくて僧が性生活を行うことが許されるばかりか、曼荼羅中の諸天菩薩はおろか仏位にあるものまで神妃をもつように描かれるに至った。これが左道密教といわれるものである。然らばどうしてこのような特殊な考え方がこのチベットにだけ起って来たのであろうか。これは大きな然も興味ある問題を呈示しているも

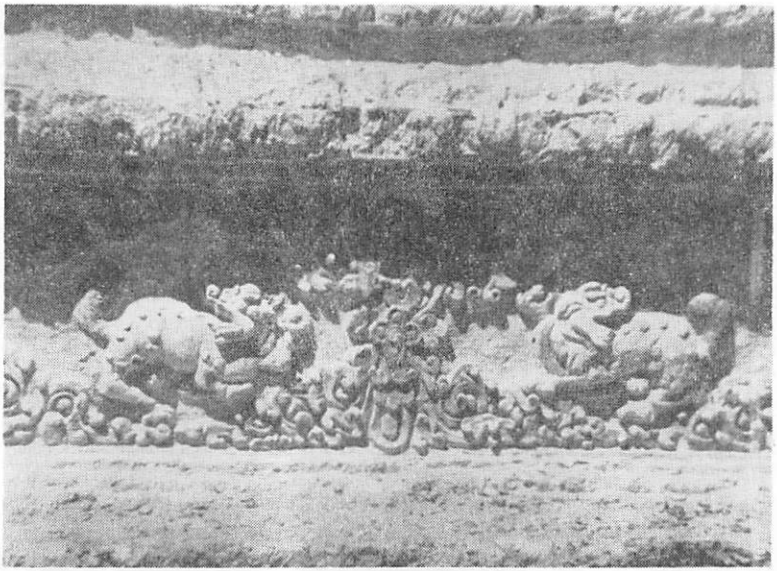
のと思われる。

◈

ラダクのゴンパをめぐり歩いて興味をもつのは描かれた壁画が絵の巧拙はあっても身体の均整、持ちものや装身具など全く同じ形態をしている。これらは「造像量度経」を基準として描かれているから○○菩薩や△△天王はどのゴンパへ行っても同じ様式である。然しその手法はインド風あり西域、西アジヤ風あり又中国風のものがあって実に多種多様である。

(イ) まずインド風なものとしては、勿も仏教はインドから渡来して来たからインドの影響には違いないが、その手法からみてアジャンタの壁画を思わせるものあり、又仏教のチベットへの輸入時のパーラ仏の影響と思われる観音あり、ターラ菩薩ありである。又同じインドでも西北インドカシミールの回教風のミニアチュールの影響とみられるものもある。これはアルチゴンパの巨大な観音弥勒文珠の像の壁画のうち、観音の法衣に回教風の宮廷生活をしのばせる絵が見出される等である。

観音の法衣 ―西アジヤ的な絵が見られる―



コ マ 犬　―中国の影響―

(ロ)　中央アジヤの影響と思われるのは毘沙門天の絵が多いことである。特にネズミをもった毘沙門天像はまさに玄奘の大唐西域記のコータンの記事を思い出す。又壁画の随所に見出される建物全体を鳥瞰する手法はコータン的なものとされている。

アルチの Du-khang の堂内の宮廷図の中で王と王妃が酒宴をもよおしている図や王妃がプリンスと僧侶と坐っている絵などはまさに西アジヤ的で、王妃達の上の回教風な飾りが印象的だ。それに又騎馬武者の狩猟文様、或は飛天等数え上げればきりがない程である。

(ハ)　更に中国の影響と思われるものとしてはスピトク・ヘミス等東のゴンパにその傾向が多い。シェーゴンパの祖師シャンブナータの像は中国僧に似て居り、ヘミスの浄飯王が、修業者に生れたばかりの釈尊の将来をうらなわせている図など中国と見まちがうばかりだ。又スピトク寺の十象の図など悟りの段階を示す禅家の十牛図（牧牛図）のやき直しで僧の姿も中国的である。然もも

っと大事なことは僧の作法は中国そっくりであり、且つ又年の数え方まで十二支を使っている程である。

このように考えて来るとこのラダクの仏教にはあらゆる要素がとり入れられ、逆にここは文化の媒介地であるとまで言えよう。然らばこれらを媒介したものは何ものであったろうか。この文化交流という歴史の重要な担い手は？

◈

ラダクの人達は独特のラダク帽をかぶり、いつも羊の毛皮を背にして歩く。ラダク帽は横にツバがぴょんとはね上っている。これはチベット帽の耳の所に深いおおいがあると同様冬の寒風にこれを下げて耳を保護する為だ。毛皮をしょって歩くのもその為だ。私の行った八月下旬でさえ日中は三十度をこしても夜は十度以下に下る。三千五百米から四千米の高さに加えて乾燥した土地なるが故に常に毛皮をかついで歩かねばならない。このように苛酷な土地なのだ。今でこそ自動車道が峠を上下することをさけ、尾根の中腹から中腹へとぐるぐるまわりに作られてはいるが、昔は部落から峠をこえて次の部落へと旅した。いはば部落は宿場の役割を果していた。あのラマユルの大寺のように今はフトラ峠からの自動車道から大分下らねばならないが、もとはといえばこの寺は谷川沿いの街道の部落から見上げるような岩山の上にあった。この部落から旅人達はフトラの峠を越そうとし又越してここに宿り旅の疲れをいやした。その中心がこの寺だったのだ。

あの部落の出口入口に林立するチョルテン（仏塔）にしてもそうだ。中には延々百米も続くマニ石（経石）の山も、夫々の宿場が霊場的意味をもっていたことと同時に、旅の平安を祈り且つ感謝して奉納した信仰のあかしであった。従ってこのチョルテンの列が延々と街道沿いに存在するわけだ。然してこのような苛酷な大自然の中では人は一人で旅行出来ない。いわゆる隊商でなければ旅は不可能である。先述の如く日夜の温度差が二・三十度もある土地では彼

等は常に死と背中合せで旅しなければならない。温度差だけではない、あの断崖絶壁一歩踏みはずしたら千米も二千米もの谷の底、到底生きてはもどれない。冬にはマイナス五十度にも下るとか、もし日のあるうちに次の部落に行きつけなければそれこそ大変、このような極限情況に生きているからこそ無数のチョルテンを生み出し美しい仏塔仏画を作って行ったのだと思われる。

仏教のうち顕教の理論仏教が入って行ったが定着せず、密教がとり入れられ、又密教も左道密教として特殊な形態を発展せしめたことについてもこのことが言えよう。理論や理性には頼れず常に仏と一枚となり共に生きる神秘主義が発達するのは当然のことである。彼等が道を歩くにも坐ってお茶をのむのにも、雑談する間にもマニ筒といって小さなお経の筒をぐるぐるまわしながら「オンマニペメフム」と念仏をとなえているのも仏なくしては生きられないこの環境を除いては考えられない。特に仏法僧の三宝より「師」を重んずるこのラマ教の形

経石の山　こんな山が百も二百も続く

態も遠くの仏より身近な師、理論や哲学で要請される三宝より、この現実に於て手をとって導いてもらいたいという願望の表れで、それ程切実なものがあったと考えられる。

これと同じことがゴンパ（寺）についても言える。それはこんなに貧しいきたならしい所にこんな立派な寺が、こんなに美しい壁画でおおわれているのかとの疑問にも答えられる。もともと寺はこの大宇宙の理法をこの世で実現する小宇宙、理想の境だ。彼等は生れてから死ぬまで風呂にも入れず、着るものは唯ボロだけ、食べものも極くまずしい。せいぜいスイトンのようなものばかり。この世が貧しければ貧しいだけ理想は美しくなる。家が犬小屋のように小さければ家の絵はみどりの木々におおわれた美しい園の豪華な邸宅が描かれる。ラマや超能力者の力によってその夢を実現せんと祈るのだ。実現しないまでもしばしその夢の理想境に遊ぶ。これが秘密の合一の一つだ。

とにかくチベットは貧しい。未だラダクでは一妻多夫の制度が残っているくらい。法律ではきびしく禁じてはいるが次男三男は貧しくて嫁をもらえないから長男の嫁を共有させてもらうしかない。又こうすれば人口はふえない。子供がふえても猫の額のような土地だから財産分けは出来ない。又、そんなことをしたら共倒れになって了う。その為のかなしい生活の知恵でもあるのだ。その上一家の中で子供は必ず一人は寺に入れる。信仰の為と言うよりは口べらしという「棄民」が信仰という名をかりて寺へ子供を送りこむ。こんな所だからこそ仏を更に「師」をたよりにしなければ生きられない。そこに「即身成仏」の密教の成立する基盤があるのだと私は考える。

これが又あの鬼形の男女神抱擁の図や像となったともいえよう。私はラダクの一夜黒々とそそり立つ奇岩にゾーとして血の氷る思いがした。木のある山を見なれている我々には奇岩がこれ又黒々とした星空にそそり立つ姿はまさに悪魔とも思われるし、砂漠の強い風は岩に当って地獄からの呼び声とも聞かれよう。そして又同時にその声は悪魔と

歓喜仏

斗っている雄々しい守護神の力強い雄叫びとも聞こえよう。そんな中にあって人間の理性とか知慧なんてゼロに等しい。唯本能のままに愛し合うことしか残されていない弱い人間。然もその行為を通じて子供が生れ、唯一の財産たる家畜がふえるに及んでは猶更のこと。「性イコール聖」という特殊な形態を生んで来たのだと思う。この現代人から好奇の目で見られている恐しい形相の男女合体像はやはりチベットのきびしい自然の切実な自己表現と考えられるのではないか。あの絵画の色彩の毒々しさも暗いゴンパの中やあの灰色以外に何もない大自然の中では不思議と調和している。そしてこの原色の如く生活も性も原色的で解放的となるのであろう。この自然の中ではこざかしい理性も思想も蟷螂の斧でしかないから。

かって私は仏教は通商路に沿って線として発展して行き面としてはひろがって行かなかったことを考証したことがある。ここチベットでもこのことは当てはまる。仏教は通商路にそって発展し、宿場宿場が霊場的意義をもち、人々

は宿場の中心たるゴンパに旅の平安を祈って旅して行った。この仏教伝播の主役は隊商であった。彼等はロバやヤクの背中に荷を背負わせて旅を重ねた。荷物だけではない、各地の文化をも背負って。為にカシミールの文化をアルチのゴンパに、中国本土の文化も又スピトクやヘミスのゴンパに運ばれて来た。これがラダクのゴンパに各地の文化がミックスされている所似であり、言い換えるならこのラダクは東西文明の十字路でもあった。そしてその媒介者主役は隊商であったのだ。この隊商は前述の如ききびしい自然の中を旅して行く、大群団をなして。宿場から宿場へと旅する。一日の行程はその動物の足の道のり。従って宿場宿場に金が落ちる。だからこれらの経済的基盤によって僧院は建てられ又維持されて行ったのだ。

然し現代は自動車道がスリナガルからレーへと直線で貫いている。たとえ昔の路巾をひろげて部落の中を通っているとしても砂塵をまき上げて通り過ぎて行くだけ。為にその部落は狭い畑を耕し、羊を岩山に追い上げる原始の生活に逆もどりして行った。従って寺は無住になり、貴い文化財は崩壊の一途をたどりつつあるのが現状だ。

丁度仏教文化華やかなりしガンダーラが東西交流の幹線たる陸のシルクロードから海のシルクロードにバトンタッチされた時、さしも栄えたガンダーラの仏教は崩壊にひんし、そこへ白フンが駄目押しとも言うべき攻撃をかけて西北インドの仏教の息の根を止めた。華やかなりしものが衰えるその悲哀、これこそ「末法の到来」としてひしひしと人々の胸をうった。これと同じように便利な自動車道の建設はラダク仏教に法末の哀調をかなでさせて行った。

◈

かくて私のラダク西チベット高原の駆け足旅行は終った。結局ここで問題となったものは「風土」であった。

そのいい例がゾジラ峠である。あのチベット高原への入口たるこの峠の上と下とでは全く自然環境が違っていたこ

とは述べて来た。然し自然環境が異るということはそこに生きる人間の生き方が異なることにつながった。従って生き方の表現たる文化宗教が違って行くことは当然のことである。

例えば仏教は砂漠にはストレートには生きられなかった。何らかの変容がなければその乾燥世界には生きられなかったのだ。なぜなら最初の仏教はモンスーン圏の農耕社会を基盤とした商業経済の発展という過程で生れた。商人にとっては人種の黒白身分の上下は何ら問題ではなく、貨幣価値のもとすべての条件は捨象されるのが原則である。従ってこれらの環境で生れた仏教が普遍性平等性を旗じるしとすることも又必然のことであった。又モンスーン的農耕社会では米や麦をそして家畜の乳で生きている。特にヒンズー的社会では牛が農耕の担い手であり牛乳という動物蛋白の供給源であった為、これを殺すことは分身を殺すことに等しい。だから牛を神様の使いとして殺すことを禁じて来たのだ。同じように農耕社会では動物を殺さなくても生きて行ける。動物蛋白は豆や大豆の植物蛋白でおぎなえる。そこで殺生戒というものが出て来る。然し砂漠にこの戒律をもって行ったら一日たりとも生きられない。そこでは羊を殺しその肉や毛皮なくては生きては行けないから。このようにモンスーン的沃地の文化はモンスーン圏の外に入っては行けない。世界地図をひろげて見よう。アラビヤから中央アジヤを経て蒙古新疆までの乾燥世界と全く同一の範囲に回教がひろまっている。これはアラビヤの砂漠で生じた砂漠の文化、砂漠の生活の原理たる回教が、砂漠という似かよった乾燥した環境の中に住む人達には全く適合した指導原理としてうけ入れ易かった故であろう。反対に湿潤の世界にも湿潤の世界に生きる最適の原理がある。これが沃地の文化である。従ってカシミールに砂漠の教えが入って来ると序々に変容を遂げて多分に多神教的になって行ったこともうなずけよう。

同じことが仏教の内部にも言われる。モンスーン圏の所産たる仏教がチベットに入って行くと、そのままでは生き

られない。従って乾燥の世界の原理が加わって異質な文化を形造って行った。即ち顕教が消滅し密教が定着し、又その密教も他に類を見ない左道密教へと。然も非常にシャーマン的なものへと。

これらは夫々の自然の中に生きる人間がその自然と斗いながら自らを作り出して行った人間の自覚であり文化であり宗教であった。否むしろその風土が人間を通じて自らを自覚する風土自体の自己限定そのものが文化であり宗教であったと考えられる。

かく西チベット高原への旅は私にとってこの点で大きな収穫であったと思う。

参考文献

The Cultural Heritage of Ladakh (by Snellgrove and Skorupski)

The Iconography of Tibetan Lamanism (by Gordon)

Tantra Art (by mooKerjee)

Trade and Tracle Routes in Ancient India (by Chandra)

金岡秀友　密教の世界観

春秋社　講座　密教　1、2、3、4

浜田　隆　曼荼羅の世界

石田尚豊　恵果・空海以前の胎蔵界曼荼羅

真鍋俊照　タンカ

井上隆雄　チベット密教壁画